

横浜市小学校社会科研究会

4 学年部会

研修会記録

第 7 号

令和元年 12月 13日

横浜市小学校教育研究会

会長 榮 秀 之

横浜市小学校社会科研究会

会長 新 井 篤 志

同 学年部長 岩 羽 純 一

【提案日時】

12月 4日 (水)

【会 場】

横浜市立 山元 小学校

講師 鳥山 真 先生 (浦島小学校 校長)

講師 鎌田 和宏 先生 (帝京大学教育学部 教授)

提案 田川 晋啓 先生 (山元小)

司会 宮本 尚樹 先生 (滝頭小)

記録 高橋 惇平 先生 (北方小)

○单元名「わたしたちの神奈川県 ～寄木細工を受け継ぐ箱根町のまちづくり～」

○授業者 (田川先生) 自評

- ・ 指導案検討のときから単元の指導計画が変わってしまった。一人の児童が「鎌倉市の人たちも鎌倉のまちのために考えていたように、箱根町の人たちもそうなのではないか」と前単元の学習を生かした発言をしたことがきっかけだった。
- ・ 本時の学習問題である「寄木細工がなくなったら、箱根の人はイヤなんじゃないかな」を、行政に関わる人の視点でも考えてほしかったが、子どもたちの発言からは出てこなかったように思った。
- ・ 子ども同士のつながりが見える授業にしたかった。話し合いではなく語り合いになる授業、血肉の通った発言が表れる授業にしたかった。

○質問

Q まちの風景を資料として出したタイミングの意図は？

A 箱根のまちが寄木細工を応援していると捉えている子どものふり返りをみとって提示した。だが、まちの風景よりも、(授業をしていると)人の営みに着目していた印象があった。

Q 子どもたちが「寄木細工がピンチ」と言っていたが、根拠は？

A 実際に金指さんから話を伺ったことから子どもたちが考えていた。

Q 子どもたちにとって「単元を見通す学習問題」をどう捉えていたか。

A 「箱根町ってどんなまちなんだろう」と考えていきたかったが、むずかしいと考えた。寄木細工を通して箱根町を見てみると、より具体的に分かるのではないかと考えた。悩んだところもある。

Q 本時の学習問題「箱根の人」とはどのような人を具体的にイメージしていたのか？

A 鎌倉の学習と同じように、町役場の人、駅近くの商店街の人、工房周辺に住んでいる人など、混在していた。

○研究協議

- 子どもの発言がユニーク。「宝物」「仲間」「コラボ」など、子どもの言葉で事象を捉えているところがよかった。
- 自由に語れていたのがよかった。
- 資料に関する発言が少ない印象を受けた。事実から語ることも、 「たぶん」など推測で語るものが多かった。
- 事実からはなれていったのは、学習問題が「イヤなんじゃないかな」と感情面が強かったからではないか。
- 「有名にしたい」と「売り上げを伸ばしたい」が発言の中で混在していた。子どもは様々な立場で発言していたからではないか。視点を定めると、展開が変わっていったかもしれない。
- 子どもの予想を「箱根に住んでいる人が本当にそう思っているのか？」と実際の事実と照らし合わせて、考えていくとよかったのかもしれない。

※研究会代表 梅田校長先生より

- 事実が少なかった。「何を思って宝物と思っているのか」、子どもの考えの根拠となっている事実が見えるとよかった。
- 教材研究をすればするほど、授業者に見えてくる事実が増えるが、いかにそぎ落としていくかが鍵となる。
- 単元を構想するとき、「単元を見通す問題」と「調べること」の整合性を吟味する必要がある。

<講師の先生より>

○横浜市立浦島小学校 校長 鳥山 真 先生

視点①単元づくりについて

- ノートのふり返りから次時の流れをつくったり、共通の土台づくりや問い返しをしたりするなど、先生の日ごろの積み重ねが生きた授業である。
- 神奈川県の特徴ある地域の単元は、ゴールのイメージ（つかませたいこと）は浮かびやすいが、水やごみの単元よりもスタートの学習問題（単元を貫く学習問題）の設定が難しい。
- ある児童の思いをくみとっての学習問題だったが、他の児童はその学習問題を最初の段階で切実な問いとしてもっていなかったのかもしれない。事実の積み上げから問題意識が生まれてくるので、どの事実を追究していけば、ゴールにたどりつくのかを練ることが大切なのではないだろうか。
- 「想像をもとに語る」と「事実をもとに語る」ことの違いを意識する。社会科はあくまでも事実をもとに、社会的事象の意味を考えることを忘れてはいけない。

視点②授業づくりについて

- 社会的事象の意味にどうしたら迫っていくのかを吟味していく必要がある。
- 4年生の発達段階でまちづくりについてどこまで気付かせたいのかを明確にもつ必要がある。
- 社会的事象に対して、「本当にそうかな？」と思える子を育てていくことは、公民的資質の育成の一つとなる。

○帝京大学教育学部 教授 鎌田 和宏 先生

本時について

- 活発に率直に話せる和やかな雰囲気を感じられた。
- 単元展開を考えたときに、子どもは本当に問題を意識できる展開になっていたか。教師がつかませたいことと子どもの思考の流れとのすり合わせが絶えず行うことが大切。
- 本時は子どもの推論に終始していた印象がある。もちろん、授業の構想の中で推論が必要なときもあるが、事実がないと結論が出ない。「箱根の人たちはどう考えているか」という事実が読み取れる資料が必要で、考えるためには事実を見つける必要がある。

研究について

- 研究会の視点①の「単元を見通す学習問題」の「見通す」は1単元レベルで考えるのではなく、1年間や数年間レベルで育てていく必要がある。子どもが「見通せる」ようになるためには、学習経験を積み重ねていくことで可能になっていく。複数回・重層的に積み重ねることで、「見通せたり」「計画を立てたり」できるようになるのではないか。
- 授業は、子どもの見取りが基盤。人間形成につながる。
- 戦後の初期社会科では、「だまされない子どもを育てる」を大切にしていた。それは今でも変わらない。
- 「問題をつくる（問題解決的な学習）」と「問題が生まれる（問題解決学習）」の違い。問いは、追究していく中で切実になっていくときもある。
- 話し合う活動は必要。価値を吟味し合ったり、合意形成したりする中で、自分の考えを確かめたり深めたりすることは大切にしていきたい。
- 毎時間、ふり返りはやはり必要ではないか。ふり返りは問題解決の「吟味」の場面である。
- 教師が与えた資料で調べることから、だんだんと自分で調べることのできる子どもに育てていく必要がある。

文責 岡崎 巨樹 (山下小学校)